あいのその　2024年6月号

「キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり
組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて
体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。 」

（エフェソの信徒への手紙4章16節）

愛の園保育園　042-325-1045

新約聖書・エフェソの信徒への手紙は、使徒パウロが獄中から書き綴った手紙ですが、別名「喜びの手紙」と言われるほど、喜びや感謝の思いが綴られています。そしてそこには「ひとつ」という言葉が頻繁に出てきます。これは、獄中にいる自分と、そんな自分のために外で祈って支えてくれている教会の人々との絆について語られているからです。置かれた立場や境遇、環境などの違いを超えて互いに尊重し合い、支え合うという意味においての一体感、その関係性について喜んでいるのです。

私たちは聖書の言葉に限らず、社会や人生の様々な場面において、互いの違いを超えて受け入れ合い、認め合う、そのことによってひとつとなるということの大切さを幾度となく教えられますが、しかし私たちにとってこれほど難しいこともないでしょう。もともと同じ目標や目的のために行動を共にしたり、信頼関係があったはずの人々でさえ、ちょっとしたことで分裂してしまうのですから、主義主張や考え方が全然違う者同士がひとつとなるということがいかに難儀かということを、私たちは多かれ少なかれ誰でも経験します。そのような私たちに、この御言葉は語ります。ここで言われているのは、それぞれがどこかで妥協点を見つけ出し、我慢して無理やりにでもそこに落ち着けということではありません。ひとつの集団をひとりの人間の体にたとえて、お互いが相手の欠点や弱点を補うことによって、本当の意味でひとつとなることができるのだ、というのです。私たちは、自分の体の中で弱い部分があれば、当然、それを庇います。そうやって私たちは生きているのです。

全然違うからこそ、それが補い合いながら組み合わされることによって、それぞれ成長させられていく。それこそが、私たちの目指すべき、そして神さまが私たちに求めている一致の姿です。誰も完璧な人はいません。私たちひとりひとりはみな不完全ですが、だからこそ互いが弱さを認めつつ、助けつつ、そして神さまの愛によって固く結ばれ、ひとつとなっていくことができるのです。

（牧師　西脇　正之）